

## 「ありのまま」を問う旅

西 加奈子

旅行が好きだ。

キューバ、クロアチア、チベット、様々な国へ行ったが、実はひとりで行ける国はほとんどない。旅行は好きだが、私は大変な怖がりなのである。

まず、飛行機が落ちないか心配だ。無事着いたとしても、預けていた荷物が出てこないだろう。ホテルも、何かの手違いできつと予約が取れていないし、よもや取れていたとしても、シャワーからは冷水しか出ないはず。やっと街へ繰り出しても道に迷い、騙されて連れて行かれた場所で金品を奪われ路頭に迷うのだ。本当に、そんなことばかり考えている。

そんな私でも、唯一ひとりで行ける場所がある。

ニューヨークだ。

もちろん、初めてニューヨークへ行く前も、前述のことは考えた。怖くて仕方なかったが、それでも行きたかったのは、ニューヨークがあまりにも眩しかったからだ。ウディ・アレンの、スパイク・リーの、ポール・オースターの、ア・トライブ・コールド・クエストのニューヨークに、どうしても出会いたかったからだ。蛮勇をふるって辿り着いたニューヨークの街は、だからひととき輝いて

見えた。タイムズスクエアの華やかな雑踏、セントラルパークのみずみずしい緑、ブルックリンブリッジから見るマンハッタンの、クールな佇まい<sup>チヤウマイ</sup>。そのどれにも心奪われ、私は毎秒有頂天だった。だが、ひとつだけ困ったことがあった。

素敵すぎるのだ。

ニューヨークのどんな街角、どんな風景を切り取っても、あまりにニューヨーク、私が憧れた街そのもので、「ニューヨークすぎ」で、面映ゆくなってしまうのだ。私は有頂天になりながら、次の瞬間には照れて爆笑し、つまりとても不思議な道程を過ごした。

何度行ってもそうだった。ニューヨークは、あまりにニューヨークすぎる佇まいで、私を魅了した。すごい街だった。

そんなニューヨークの、ニューヨークすぎる部分に反応して、いちいち感動を止めてしまう人がいれば面白いだろうな、と、あるときふと思った。それが、『舞台』という小説の始まりだった。

主人公葉太は、すぐに浮かんだ。ダイナーで朝食を食べているシーン<sup>シーン</sup>は、私も経験したことだったし、過去の恥ずかしいことをいろいろ思い出し、「あ！」と声をあげてしまいそうになるのも、私と同じだ。でももちろん、葉太は私とは違う。葉太はもっと繊細で、

もっと自制心があり、もっと苦しんでいる。

その理由を考えていると、彼の父が登場した。彼は父に対して、ねじれた感情を持っている。彼がこの旅に来たのは、どうやら父が関係しているらしい。

執筆中、二度ニューヨークへ行った。いつもの旅と違ったのは、私のそばに葉太がいたことだ。私は葉太と共にニューヨークを歩いた。五番街を颯爽と歩き、セントラルパークで思い切り空気を吸い込み、見知らぬ人に話しかけられて笑顔を返した。そして、そんな風に過ごしている私を、葉太がいちいちたしなめた。そんな浮かれていると、いつかバチが当たると、と。うるさかったし、面倒くさい奴だったけれど、いつの間にか私は葉太を深く愛していた。彼は、真剣に生きていた。だからどうしても、救われてほしいと思った。

葉太は、強烈な自意識を持っている。それを持っているがために恥ずかしいことをしないで済むが、恥ずかしいことをしないで済んでいる自分を恥じている。「ありのまま」ではない、「まるごと」ではないことに、ある種の罪悪感を持っている。

せつかくやってきたニューヨークの街は、あまりに素敵で、葉太はだからより強く、自分を締め付ける。少しでも気を緩めると、すぐにニューヨークに飲み込まれてしまうからだ。そしてどこかで、飲み込まれたがってものいるのだ。

葉太の「ありのまま」は何なのだろうか。「まるごと」の自分って何なのだろうか。

自分を演じているという意識に苦しめられている葉太は、ニューヨークという、まるで舞台のような街でどのようなふうにかか。多かれ少なかれ、葉太は誰の中にもあると思う。舞台で演じる俳優のように、この世界で「何か」を演じ続けている私たちは、どうしたら本当の「私」になれるのか。

葉太と共にあった旅は、私自身の「ありのまま」を問う旅でもあった。私が得た結論は、とても当たり前で、もしかしたらつまらないものだったかもしれないが、葉太にとって、そして私にとって、とても大きな、意味のあることだった。

(にし・かなこ 作家)